



南總里見八大傳 第九卷 二七

イ管^特
600
269



600
269

南總里見八犬傳第九輯卷之二十七

東都

曲亭主人編次

第一百四十二回

而滅を誣て辰巳証簡を貽ま
故事を尋て政元名畫を疑ふ



却説巽於兔子の當晩絶て久しき宿をまきし枕と枕の並頭の蓮花も優るく横の
 袖比目鳥の翅も異るを我一句彼一句相譚ひ曉ま愉々快々平山の雲ハ溺愛の
 岫も起る夢を載せ楚臺雨の恋憐の窓を打てる人知らぬ蚊蝶花小戯とく
 屢露を食れぬ不飽を蜻蛉水小尾を濡して枯枕を置ても自安を盡し心蕩け魂
 浮も溫柔の卿合歡の花醜態癡情送不禁せざる曉天の稍疲勞も初て睡み就
 未だいふと天の明るを知らぬ目の高き三竿許外で晝飯炊く時候夫婦驚
 覚俱不起出で巽ハ速く戸を開き火を打て茶を煮る程於兔子の湯を汲み漱き

顔を拭ひ手脚を洗ひ。鑊醬を添て梳髪を熱脂白粉の故きを温れて新らする。三十
婦人の化粧生半の意を用ひ。身装約一晌有餘を造る。梟折酒肆の小廝
味噌醬油の所要を來り。於兔子の巽の商量。先山幸の裁判の歡ひを
いんと。昨宵樵六遺措。那漆罇を遣はす。是は美酒三三。何れは櫻鷄卵三
十。苞ふとの來よ。小廝の吟。小廝の得走。程もあらず。三種
引提て。來り。於兔子。是は小廝の齋。樵六許赴き。小廝の宿醒を聊恙
あり。れ。分を休り。宿野。在。當下。於兔子。樵六其酒舖を復し。饋る。昨日夫婦
口舌の折撮合。風波。風。理。事。歡。云。云。演。を。樵六。聞。あ。その
歡ひ。然。る。と。さ。罇。酒。菜。復。さ。熟。親。ひ。合。意。昨日。既。あ。ひ。け。う。
年中画額の下地を送。咱も。花主の身達。多。那許の酒費。う。老。報。ひ。せ。ら
る。中。あ。ん。や。と。固。辭。を。於。兔。子。の。推。禁。り。否。や。奴。今。來。ぬ。ら。う。折。の。歡。ひ。の。さ。ら。だ。

る。も。あ。ん。身。の。憑。ん。思。さ。ま。あ。の。の。を。と。り。受。ひ。ね。い。と。と。樵六
才の點頭。其意も。既。精。了。那頑童の。更。さ。心。昨宵も。其。示。を。如。く。其
義。さ。ら。胸。安。れ。意。の。這。菜。田。の。山。院。然。る。美。麗。さ。行。童。あ。ら。甲。見。こ。も。見。こ。と
云。尊。必。高。く。今。日。聞。こ。さ。り。人。必。是。老。る。狐。飲。狸。の。主。を。弄。ぶ。生。変。化。の。疑
る。咱。等。山。入。て。木。を。伐。る。折。動。ま。れ。山。鬼。の。爲。小。嚇。さ。る。こ。間。こ。ま。り。登。時。准。備
火。銃。を。多。く。其。方。推。向。て。空。丸。を。放。ち。う。ら。穰。へ。其。妖。怪。立。地。の。退。き。去。ら。ま。ま。の。を
る。大。の。故。の。我。猶。夫。の。あ。ら。ね。ど。も。年。來。這。鳥。皆。銃。一。挺。を。持。り。明日。より。上。山
拵。を。夙。果。七。か。り。來。て。那。妖。物。の。來。り。を。等。て。必。よ。狙。撃。て。其。本。體。を。見。さ。ば
巽。妻。惑。ひ。覺。て。い。う。お。ん。身。の。胸。安。ら。む。咱。等。小。任。ひ。ひ。ね。と。小。捕。る。と。説。話。を
於。兔。子。の。急。不。推。禁。り。て。并。い。勇。ま。さ。ま。さ。ら。尚。那。頑。童。が。変。化。を。真。の。少。年。を。え。ん。ぬ。
人。を。害。す。罪。重。り。と。思。は。れ。後。悔。を。ま。の。う。ら。及。ぶ。を。死。す。所。行。で。は。な。や。と。詰。ま。

樵六冷笑ひて然るの遠慮多しや聞ふ頑童去宿所交加来ぬ朝又
 書るる日景傾く下晡の時候ききしれふりて思ふ地狗天狗陰物れ見輝
 つて夜宗まき是其真の人るぬ明證と假し不足る者なり況や我這晴りて相
 る及びて他へ変化欲真の行童欲いふと謬いふその美も心安りふと解
 して於兔子の歡ひ信て然るふ身任てん明日より山梯を疾果来て埋
 伏せせらるるを願ひけは奴先見出さる走来て疾お身報人時分違へ
 る多と謀合多告別て於兔子の宿所へ還りけり然る異い這計較を告ら
 さま一毫も料り知るさ下りまけども於兔子樵六といふ西魔王の佛心を打
 破らして年来修せ善行と平暗の澳へ放たさし神の祐も戒之疑ふ故ふ
 畏るる其似る鳥と俗中云於兔子が日毎の薦る隨意酒を喫み儲を討り夜
 亦夫婦枕を雙て淫酒の樂耽るる賣買のまき暮さる借財の増も増さるる

思ふまでいふり六伴てて且定て人の錢を借て還さる是るの後義父九里平の旨
 の精進せ家廟の家火の要を蔵めて架棚の足さる補ふその墓請も藥師
 請も排斥て見さる知又那神童詭言る虎の画額まき等附る只虚々言て過其
 自餘の画額故ら小賣畫まで取画る然る異い怪まき不似不善の根返る嫉妬
 徴て内を怖る本性浮薄の癖を於兔子に只那男色を防んとし思ふを是るりの後
 村長より召す病着る假托て辭せ日毎宿所不在疎遠十四五日及ぶ程不有日
 又村長の老妓が小厮さるていさる頃日る来まき秋も早半過て月瞻る頃ふ
 るけは錦入る衣多あり央錢の望あり開へ左も右も七まらせん明日風て
 来ぬぬいさる人を疎まきも涯のあむと怨らる口状の稜らぬぬ於兔子に
 今又固辭の由ら他央錢の前借もあり然るも萬事差配の任る長の忠告の
 憎むるも多る債の類を寛解る便宜あるさるむと尋思をあらむと答りて

躑躅して返りし其の美を巽告知し其次の朝辰牌時候より於免子の絲織の小裏を
抱きつ立出て村長許赴折先熊六の宿所立寄て悄々告るを奴家今日休との
情由ありて已に長殿許召さるる日暮還らん故に身小憑侍下那頑童
奴久しきれも出て来ぬをいも見せ奴家召在らぬを幸か引合れ争何せん願
お身今日一日の山柙を骨休し我身代りて留守さ其立舞の二給まれば二百錢
まればおせんも憑ひて種六聞果を并あるのり然に立舞貫つて何せん意お我
怒お身宿所の神輿を居て做さるる日消き東金疑ふ那妖物も出来好々
我せん術あり今より悄地の準備とまの宿所の頭を守ると便宜の樹蔭尻間炊柴
垣の裏もど小躲れて待たるる。縦地狗まれ天狗まれ目め小見あるのり。敷
振るも段我小在と任とお身長殿許疾ぬぬぬのり。おと免子の念念天點
頭て念ふ恋を左右もお身任侍りて脱落ぬる去らぬ。悄語果も尚遺る

詞の露をかりて憑ひ秋の日影の朝曇早慶合るを瞻仰る。いも空の叢雲の脚をたも
村長の宿所へそぞろとまひける。おの日巽妻の留守と。單徒然の堪さるる。銭あふれ
酒の喫まで朝より出で店舗小在り。二旬有餘苦困中足らぬる。十二生月の画
額を此彼と画く程の秋の日短くて。下晡ありし時候那行童忽然と来て履衣
頭小存とよ。主人我詭言。虎の画額へいふを。と向れて巽の駭き着て頭を掻く。陳
ぶさ。那画額の更へも仰付らば。次の日より。小可風寒小冒されて。昨日まで臥在り
あひも。遣ても中ゆ。願するが又十四五日の用捨を仰さるる。いも。とち勸解を
行童所りの恨る色も。然るあむ。か夫婦の浮薄の本性我知と。と候。大事を
課せしあふれ。いも。汝等猶幸ひ。那舊悪を懺悔と。新めま。欲ぬ。一善既小
進む。いも。衆愚退く。自然の天理是より。彼岸の到る。いも。懸航遠ま。あふれ。我佛
勅。いも。因て試す。いも。原の罪。深重な。鬼神衛ら。國法借さ。我慈悲。及冤

家傲。始於增罪。則業果。信鳥爵。魁兒。神筆。名画。を取。疑。思。
 凡夫。あらん。飲。是。の。貨。を。抱。く。與。他。御。の。血。見。禍。賢。者。を。禁。錮。の。路。啓。け。る。福。は。
 申。あり。て。巨。鱗。東。洋。の。還。る。の。と。も。貴。人。敵。衰。の。世。憐。ま。得。が。た。化。負。を。愛。る。が。與。年。來。
 民。の。膏。腴。を。受。む。る。奢。侈。を。も。儼。三。端。の。傲。る。美。さ。あ。ぶ。神。祇。の。勸。懲。佛。陀。の。悲。悲。る。夫。
 機。を。分。教。ま。ね。る。も。若。們。は。是。土。中。の。骸。骨。箇。王。廳。下。の。餓。鬼。を。れ。今。さ。ら。亦。何。を。知。ん。
 已。ん。く。と。爪。彈。七。軀。を。踵。を。旋。し。も。依。の。り。行。程。の。巽。へ。句。も。答。由。申。く。且。羞。且。畏。れ。
 背。の。冷。汗。を。流。ま。の。頭。を。低。て。默。然。う。介。程。件。の。行。童。の。異。が。宿。所。を。立。去。つ。と。ゆ。く。
 百。歩。の。及。び。路。の。這。方。の。冬。青。樹。の。蔭。の。張。ふ。入。り。是。則。別。々。の。亦。那。山。本。樵。六。の。
 寬。濟。一。鍊。砲。の。火。蓋。を。鎖。を。挂。と。放。其。憐。む。一。件。の。行。童。の。背。を。胸。を。擊。抜。ま。け。ん。
 一。聲。苦。と。叫。び。も。果。を。身。に。仰。及。ら。し。と。什。は。け。り。當。下。樵。六。鍊。砲。引。提。ま。く。樹。蔭。を。立。出。て。
 死。活。の。小。と。走。寄。る。程。も。あ。ら。ま。亦。あ。の。光。景。胸。を。淡。を。吐。嗟。ま。る。身。を。跳。り。

出。る。の。慌。一。の。單。底。草。履。穿。あ。を。走。つ。て。其。里。の。ゆ。り。相。る。の。較。ま。一。の。那。行。
 童。を。今。村。長。許。う。来。ひ。の。於。鬼。子。の。胸。骨。打。碎。ま。て。鼻。より。も。口。より。も。吐。き。
 鮮。血。襟。に。帶。さ。韓。紅。の。深。做。う。窮。所。の。銃。傷。の。ふ。と。不。死。の。藥。も。届。ぬ。三。塊。
 既。天。の。歸。了。六。魄。輒。地。の。隕。て。又。活。く。も。あ。ま。れ。俱。驚。く。樵。六。引。提。鍊。砲。投。棄。廢。
 居。の。槓。と。膝。組。の。胸。を。敲。き。聲。戰。を。却。愆。殺。の。う。と。思。ひ。魔。魅。逃。去。思。ひ。の。
 る。於。鬼。子。の。刀。自。の。我。銃。頭。か。る。死。も。又。狐。狸。の。妖。術。也。其。人。を。今。今。幻。目。見。
 たる。飲。ま。ま。あ。ら。ぬ。怪。し。過。て。及。び。差。池。失。策。面。目。も。異。主。然。る。と。推。量。ら。る。乍。
 麼。の。ゆ。せ。ん。ま。ろ。り。小。空。を。骸。を。披。起。う。ち。返。見。て。も。甲。斐。を。な。後。悔。越。不。達。ま。バ。
 呆。ま。て。一。霎。時。忙。然。う。事情。を。知。り。も。ま。た。巽。名。着。を。と。れ。る。怨。は。堪。ぬ。胸。遍。を。
 眼。骨。響。り。齒。を。切。つ。と。握。拳。の。遣。う。方。も。多。怒。り。不。儘。さ。る。聲。高。う。這。奴。大。胆。妻。の。
 雙。今。さ。何。等。の。分。説。あ。ら。ん。覺。期。を。ま。罵。も。果。を。脚。を。飛。七。丁。三。蹴。了。蹴。り。



残忍吹毛
 求疵
 短慮窮賊
 智出



被
 仙
 乙
 繪
 額

輾まろ樵せう六ろく身み行ゆ敵てき對たい甚し泥どろ塗ぬ々々張て脚あし縮ちぢ春はる蠶さか起た直ちら
程ほど巽むすぶ猶なほ怒いかでか勝かち勢いきほひ禁いじむももああさされれ送まくく鍊くわん砲ぱう拿とりり
振ふ込こてて樵せう六ろく頭あたま落おちてて礮ぱう撃うちち拳こぶしのの牙はもも不ふ祥しやうのの時とき運うん樵せう六ろく眉まゆ上うへ三さん寸すん打う破ぱら
是こゝ突つ見み骨ほね碎くだけけるる必かならず死しのの深ふか痕あと一ひと霎しやう時ときもも堪たままららなないい仰あや及およぶぶ儘まま息いきのの
絶たゆゆけけりり然しかもも巽むすぶ妻つまのの冤あや家かとと立た地ち不ふ撃う果くわああららぶぶ事こと遂すつつるる似にたたるる又また思おもへへ
後のち悔くわいありあり樵せう六ろく豫よよりより那の行ゆ童どうをを狐こ狸りのの妖まじ怪かいるる思おも決けらら見けん識しれれ行ゆ童どう
來きぬぬるるをを規きひひてて這い鎗しやう砲ぱうをを方かた僅わずか撃うちちままくく飲のみみけけるる妖まじ怪かい前まへ知し術じゆつわわれれ那の身みいいてて
免まれれ折おかからら村むら長ちやう許きよかかりり來きぬぬけけ於お兔う子こをを擊うちちてて其その怨うらみ復かへししるるおおららむむむむ夏なつ
差さ錯さく出いるるいいふふ樵せう六ろく我われ宅たく眷けんをを然しかもも鮮せん死しのの罪つみ人ひと結むす紐ひもてて領りやう夫ふ許きよ稟りやう必かならず首くびをを
削けらら是こゝ怨うらみ復かへすす易やすくくななららぬぬ我われ一ひと朝あさのの怒いかでかのの衆しゆ七しち捷せつ窮きゆう野ののの深ふか痕あと也なり他た死ししし
照せう人ひとのの身み及およぶぶ疑ぎははるる於お兔う子こ樵せう六ろく非ひ命めいのの死し我われ野の為ためななららぬぬいいふふ何なにぞぞ

よくの鮮せんんん理り持ぢりり非ひ陥かんささまま牢らう獄ごくのの繫けい累らい呵あ責せきのの苦く罪つみのの
死しんん折せつ悔くわいのの八はち千せん度ど百ひゃく千せん度ど勝かちとと嗔ちんもも及およぶぶ左ひだりもも右みぎももああのの年とし來きた幸さいなならら上うへのの
幸さいななららけけ家いへのの艱がい福ふく鬼おにのの立たちち離はなれれぬぬ人ひとのの蹟あとをを繼つぎぎとと今いまのの危あや窮きゆうのの事こと盡つきき
喪さうふふ此こゝのの日ひ月げつのの照てららままるる他た御ご小せう走そうらら厄やく解かいけけ今いまのの真ま受う苦く後のち竟つひのの昔むかし
語ごのの做しよまますすのの幸さいななららままとと壯さうのの回かい壯さうのの答こたへとと遠とほくく先ま四し下げをを見けん返へんまま秋あきのの日ひ早はやくく
西さい沈しんてて點てん燭じやく時とき候こうのの多たしし田でん舎しゃ素そよりより人ひと稀まれゆゆ但た來きた絶たれれ知しるる者ものああらら折せつをを
よよけれれ偷ちゆう歩ぽをを已やむむ宿しゆく所しよかかへへ入いりり猛まう可か計けい較けう奸けん智ちのの照て簡けんいいまま画えのの素そ版ばんのの額がくをを
引ひきき筆ふでをを添そへへ画え研けんのの池いけのの淺あいい深ふかきき皮かわ何なに又また幾いく層そうのの罪つみをを造つく言ごん思しひひのの隨ずい筆ふで寫しやう着ちやく
てて筆ふで捨すて身みをを起たちち纒ま逆さか旅りよのの准じゆん備びのの那の無む瞳とん子このの虎このの旁わらわ軸じやくをを袂たもと裏うら背せのの馳ちまま立たちち
去さるる又また思おもふふ我われ頃ころ酷こつくく錢せんのの憎にくみみてて銀ぎん一ひと貫くわんのの餘あま財ざいをを衣い物ぶつのの皆みな四しをを被かれれ久くくく
解かい舖ぽのの庫く在ありり身み行ゆ客きゃくああるる也なり明あ日にちよりより七しち七しち磨ま何なにぞぞ長ちやうきき旅りよ宿しゆくのの盤ばん纏ちんせせ也なり

八ノ事ノ早ニ二ノ七
七
〇ノ事ノ早ニ二ノ七

我冤家山幸樵六のぬる年。子先之妻をさへ喪ひて、單身ながら銭あつ者多。毒を吐
 る碓を舂り人を殺さし血を見るべし。前路の駝賃の外をなむ。那奴の宿野を極探らば然らざるの盤
 纏あるん噫介也。肚裏の出来は多。賊計賊智の筆帳既決り。久悄悄に背門より走去。
 案内知る樵六が宿野の赴き鎖を破ると閃くと内へ找入て東廬より刺さ月影を獨りし
 左右小榎大榎衣甚籠漏る。撈り討ら思ふも似む。金子二両三分と永樂錢買有
 餘り。獨居るれ賊難と怕れて外へ預け。飲骨折甲悲るる所為多。無の優等と懐
 夾めて又衣物の水の入れを擇合して大袂の推裏と。楚と搭駝と。昔笠茶面を隠せ徳
 出る造化と。蘆の散る浪速津を心當ふ。その通宵走りしを。知る者いささくけり。余
 程の天明て後。巽が近隣の莊客們へ。於兔子樵六の横死の亡骸を見出し。駱駝聚ひ
 又巽が版額の寫ある。貽翰を見出し。事情をいささく。隨即村長へ告知。俱の
 領主の訴。実檢使を請稟。あゝまの目実檢使出て來て。件の男女の亡骸を

檢する。於兔子。則銳瘡の樵六の杖傷。且巽が貽簡の道り。本邸の樵六。我妻
 於兔子が姦夫との不軌既發覺する。及びて男女謀合。相携て今宵逃去ら
 まく欲せ。己未迄に。趕蒐出で鑊砲を。淫婦於兔子を。矢場を敷く。倒し樵六を
 這勢ひ小駱駝。腰打抜して。巫女逃る。己舊直走蒐りと。鑊砲を。七
 他が眉間を捷し。窮野の堪きりけん。枕を息絶る。地方を去ら。妻敵を。果し
 去。愉快の似。生拘て訴ぎり。後悔臍を。嘔ども及ぶ。事の不祥。世を觀れ。是を
 菩提の種。出家し。身を雲水の儘せんと思ふ外。願ふ近隣の父老連。去の美を
 も。左も右も宜く計ひ。仍一翰如件。箕梨屋辰巳と。書りける。當下実檢使
 是を見て。則近隣の莊客們。巽夫婦と。樵六の出所。來歴及。年來の行狀を。詳に
 質問す。大家答て。巽於兔子の箇様。原西國の浮浪戸。本村の繪馬。經其梨
 屋九里平の。乾見の。做て。その讓を受る者多。初行狀宜く。近來猛可。改め。

不怠の信者ありし。五戒をもち常精進し。夫婦雙宿せし。三人の噂の聞えし。又樵六の當村根生の樵夫にて宅眷の既世を去り。今、獨居の樵夫也。年來巽が賣買の画額の下地を造つて送る。特小親しくいふ。巽が妻と情由あり。その美い知らば。この衆口紛れありし。実檢使うち。所て主君の聞えし。有司奉りて。謝断せし。巽が持戒の念佛者なり。その妻淫奔の罪あり。その姦夫と推雙て。較り果をくも。あつた。良人と。其妻を殺し。忍びが故をありけり。惜む。樵六於兔子に死して。巽は逐電をれば。虚実を糾考する由あり。そと巽が往方を涉獵して。おて。命せらる。是より村長の莊客を部して。巽が往方を索るの。時後れ。知る由あり。或は云件の樵六の性奸慳。神を敬を。亦佛を信せ。始り貪り。かける。夫婦好きて。人の稚子を求めて。養ふ。その。開け。只其養育料の錢財を貪り。その所行る。敢其子を憐れ。死され。又別人の稚子を斃盡。求る。養ふ。孰も。一年半。其

子の死するより。殺し。や。思ふ。の餘。尚。知。不義の利を貪り。け。當生。至。ら。れ。か。り。か。く。貪。り。か。く。小財を貪る。財祿あり。身。多。く。頃。彼。客。獨子。年。八。九。なり。夏。川。階。り。溺。死。け。亡。骸。を。求。る。三。百。り。七。終。つ。び。ぎ。り。の。次。の。年。の。春。の。時。候。樵。六。の。妻。の。頭。死。し。那。身。單。り。け。是。必。隱。匿。の。報。ひ。る。ん。と。思。評。入。聞。る。業。報。い。ま。足。ら。ぬ。あ。り。け。ん。那。身。巽。の。杖。殺。され。且。淫。奔。の。悪。名。あ。り。所。親。とい。は。る。是。と。悼。ま。る。況。て。巽。於。兔。子。の。浮。薄。を。七。洋。誑。ま。る。言。行。の。齟。齬。い。言。疑。あ。れ。事。好。む。村。民。等。樵。六。於。兔。子。の。亡。魂。を。市。平。の。駭。掛。き。て。問。ひ。く。於。兔。子。の。與。醋。樵。六。の。生。體。を。神。佛。の。眞。實。訓。を。圖。で。横。死。を。さ。る。且。巽。が。妻。を。誣。て。己。が。矢。を。飾。り。邪。智。好。悪。の。趣。ま。で。人。み。る。知。る。を。は。て。駭。怕。れ。惜。地。後。々。見。孫。の。極。言。を。さ。り。け。是。より。冬。く。る。ま。巽。の。所。在。知。れ。し。西。所。の。家。を。毀。て。家。火。の。皆。没。官。せ。れ。於。兔。子。樵。六。の。骸。半。馬。兵。野。の。葉。ら。れ。餓。る。狗。鴉。肥。け。り。是。後。の。話。却。説。巽。其。夜。更。を。藥。師。院。

吹て来る後悔あらん是亦容易に成るべし。左の右の思難のありける程。京の骨董店の主人、祿齋屋余市と喚ばる者、生活の與ふ所の津々来々、昨日もこの客店に在り、巽風の活き、欲する金圖の虎の画軸の事を知りて、隨即店主を介して、巽風が對面して請て其旁軸と圖をそのう。這無瞳子の虎圖、偶故老の傳聞あり、倘果して真筆なるに價は世の至宝なるべし。聞及せむのけん、東山御所様、義政公茶と好ませぬの故、故書故画の御用毎あり、頃者も亦舊する和漢の名画の禽獸を徵するの、安んずる小可が大家の經紀も、各そのを續きあうて、種々なる名筆故画幾幅、欲するに、京都御覽を歴され、御意は稱へて退けられ、小可の年来西陣の管領様、坂元の出入を許され、御物の御用あり、毎必来り、今番も亦那黒御家老、香西六人の内意あり、這頭の寺院の什物、古代の名画あるを、買まと思ひ、來り、るの折も、未だ値遇と料は、穿甲ける。這一軸、東西南北、今又外を流し、

要る。主と京師、伴ひかゝりて、我を續より、上るの意、覽備らして、御意は稱へ、造化無類の利分、功銭思ひの隨多。賣買を仕らん、這議甚殊、説話と、巽風歡ひ意外に出、敢亦異議あり、詰朝早天不起、早飯を果し、房錢を店小二還へ、余市、那扇軸を携り、余市と共、京小町赴きて、姑且他宿所居り、且、那行童、解示する。件の金圖の画の來歴を、詳に寫し、相添て、次の日、余市は、遞與する。余市則、受合を、速く袴を穿、一を腰に帶て、政乃郎中多。香西復六の宿所、造りて、人情厚く、對面を請る、件の名画を、管領家の内覽、介せられ、願ひ、復六、則その画を、往來の主、竹林巽風、只今、那果在る、と問ひ、余市、答へ、那人、其旁軸を、活令、今番、遠方より來り、留り、小可、宿所、在り、御所の、善い、召、俱、易し、と、余市、異日、御所、は、まで、画軸、且、借れ、と、余市、首尾、と、好、思、連り、額、衝、媚、辭、七、宿所、退り、けり、不題、京、管領、政、乃、其、曩、大、江、親、兵、衛、を、家、留、七、詞、敵、の、傲、より、徳、用、堅、削、

らんを疎して召す。徳用亦試較の不覚不取稍久く。病病と唱て頭出さる。あうも
 あらぬ冬替して會社百二擧の時欲得と念して案過を程の雪吹姫に初冬の風會
 されひより持病の虫積又起ると。鍼灸薬餌の効あらむ。あは給事の女房を合庫と
 徳用堅削面師徒の加持を相志しあひまて。只願ひ請果る。政元亦己を治せ隨
 即徳用堅削と召させ讀經の用度で実行せよ。行法の力を盡て姫の病悩平安の切を奏
 せしと命せらる。是より徳用堅削又出頭の折に姫の臥房の近に在り政元徳用が法
 壇降りし折閉室召させ那病者の輕重と法驗の遲速と伺ひ。徳用詭訪の序を
 びて然い姫が御病悩の虫積のこひん。相思病てまは。其法驗甲非多きといひ。政元
 政元詭と開亦誰想ふ欤。と伺て徳用然い姫が意中人。則是別命を久く
 留存する。那美少年のいん言憚りある。似旨も。館へ他とらん陪堂。傲きやう。姫
 也。孰の折ゆ倫見ると。御煩悩はさうひん。要らば。あは。と詔を政元聞きとく。

及也談ふ及び。徳用のいひ。か。と思ひ。あ。の。後。も。亦。親。兵。衛。と。諧。し。不。專。那。談。ひ。て
 甘く政元の堪ど勃然と。和僧へ出家人の似げも。何と照据の。出づ。の。秘。事。を。入
 告る。い。我。親。兵。衛。が。文武の才を愛せり。召近つて。兩暇の折の陪堂。あ。せ。も。男。女
 雜居の甚し。あ。至。り。知。示。那。親。兵。衛。の。少。年。を。れ。も。禮。儀。の。武。士。我。ま。ら。意。を。介。ひ。て
 病者の姫のいふと。倫見て。他を想ふ。儲美の。其。ま。あ。べ。我。親。兵。衛。と。女。婿。不。と。呼。領。の
 國郡を分取せん。と。素。より。望。み。野。漫。り。の。と。は。さ。と。と。と。案。ら。れ。て。徳。用。へ。一。句。も。出。ず。且。羞。て
 及て主君を恨む。けり。浩。然。一。個。の。近。習。が。次。の。間。も。我。と。来。て。大。江。親。兵。衛。召。さ。り。下。參。士
 聞え上。政元則徳用を。退。一。席。改。め。又。親。兵。衛。の。面。談。を。文武の。陪。譚。を。母。の。如。く。既。不
 佳。真。の。入。り。折。政。元。の。又。ひ。召。す。頃。日。東。山。殿。故。画。を。徴。さ。る。と。す。巨。勢。金。岡。の。画。虎。の
 一軸。也。我。の。内。覽。を。請。ふ。者。あり。其。傳。米。の。趣。文。寫。集。を。我。國。を。其。言。都。て。怪。談。の
 過。れ。信。容。う。か。し。和。郎。文武の才。子。で。學。問。亦。博。識。の。聞。え。あ。れ。何。て。疑。難。を。放。さ。と。

八傳九再卷二七
 十二
 ○文後集卷二

思ふより今日も亦見参を促し世俗を相傳へ昔巨勢金岡勅詔より馬に夜出芳宜なる胡枝花を齧るをのり外國にも相似る怪談あるは知れぬ我意宗是等の画を神はんと好事の筆を載るを前を好む者よく思へ傳へ故事の傳へる木石を造り古佛諸菩薩の畫あり信らざるは其の況や画像紙中の黒蹟面者背多背を画け面を素是其身羊體の者靈あり抜出るといふ虚談ありらんやと思ふ別亦以の事飲甚麼ぞと問れて親兵衛然い未熟寡聞の人の知らぬ非常の奇事を論をくもいねども問れども稟さざり不敬のやいむ巨勢金岡光孝天皇の末葉也姓紀氏諱圓深普天子と號し又朝日阿耨梨といふ宇多天皇の仁和四年勅依御所の障子の鴛鴦の像を畫まき或は金岡從五位下米女正其三子相覽公忠公母主也其末葉を養佳聲有りと金岡傳のたそは依傳の馬を畫きしるは是を画聖ををり然

小説といへ来り或は又故廟の繪馬に夜艾の鬼をもち乗せて走りしとの怪談あり兔路今昔の東子の飲有と覚い故物の靈ありに至りて画像と木石銅像の差別あざむいづは是を漢籍の考合い北齊の楊子華畫馬ハ夕々毎身を動して長く鳴く奇異あり人相稱て画聖とまといふ又唐の太宗の時李王献畫羊昼則欄外に出草を齧る夜則欄内臥人其理を曉る者あり一僧贊寧曰此幻藥をりて画く所南海の倭國に物着れ畫見とて夜隱る沃焦山の石磨を色和物と深具又昼見とて夜隱る物に足らざるを這西奇談國俗の金岡畫馬と目を同く七談る又唐の張僧繇金陵の安樂寺に畫さける四箇の龍に敢其睛を點せると毎は是は點せ飛去人并を誕妄とて笑する者あり一僧繇已をいふ其一點を須臾とて雲湧起り雷霆聲をもち破る其一龍雲を乘り天より失けりその眼を點せざる

三龍へ今も猶見よ。那寺の在りたる。是も亦金剛が画きしと云。虎の無瞳子に唱る者。年を同じて談るべし。或は又顧長康。多く人物を画けども。都て其眼の點せざり。人訝りて。是を問ふ。即答て。四躰妍唯本妙處。傳神寫照。阿堵中在り。是のひけ。是等ハ張僧繇と云。その用心。同く。七実事と云。不足ん。秋の他の名画。唐の蘭本立及江都王。鄭虔。王維。王墨。皆數人の如き。皆傳神の至妙あり。杖擧る。小連ある。就中一大奇。元人南邱。輟耕録。卷第十一。温州監郡。某の一女。画像新監郡。某の子と夫婦あり。及杜荀鶴。松窓雜記。載る。唐の進士顧顔。画美人。真々と媾合。七子を生せし。後画女。軟障の歸上り。其画中の子を添たるより。をいへり。文及け。具のせ。原文を照し。紛とあ。くもい。是等ハ理の。その事。のあれ。と。詳の筆。載る。是。遮莫。盡く。書を信せし。書る。是。不知。孟氏。の。但。世の人心。物因て。情鍾り。情極て。感る。を。は。あ。と。

三伏の夏の日の名画の雪山を觀る。清凉と暑熱を忘る。玄冬の霜の朝の名画の花鳥を觀る。風春の心を生ず。近日ある人の狂歌。逢もせ。見もせ。人の恋。あき。浮世画卷の。あ。け。と。詠る。あ。の。心。操る。譬。兵道。玄。地獄。變相。後。成都の人。詣來て。觀て。咸罪を懼れて。福田を脩。猶且。兩市の屠沽。其肉。爲の集。又。李思訓。大同殿の壁の画。山水。玄宗帝。夜毎々々。水聲を聞くと。あり。通神妙の稱。譽ある。如。有。佳。名画の奇恃を。の。必。無。と。又。必有。と。ま。の。故。孔。聖。怪。力。乱。神。を。語。ら。と。い。る。下。あ。の。思。按。を。稟。の。虚。実。の。知。る。よ。い。を。と。答。る。詞。の。花。あり。実。ある。辨。論。委。ま。り。を。政。元。听。く。嘆。賞。ま。て。適。愛。の。博。学。又。聞。我。憶。む。一。議。の。り。て。よ。の。学。向。を。致。し。り。好。々。都。て。あ。る。た。り。見。ぬ。世。の。事。遠。き。唐。山。の。故。実。の。左。ま。れ。右。ま。れ。明。日。の。我。故。畫。の。真。偽。を。試。て。邪。俗。説。を。破。ら。ま。く。欲。む。开。後。の。を。知。ら。び。大。誼。の。き。を。勞。ひ。て。あ。の。日。の。晤。譚。の。果。け。り。

第四百十三面 虎眼小點と異風公文廳を鬧む 衆口を數ふて京北祿齋屋を誅む

却説左京北政元ハ其の目大江親兵衛暗譚果て退り後猛可ハ香西復を召て
のまろ、齋竹林異風とやらが内覽を請ふと聞え巨勢金岡虎の画軸の一談小
就て我其異風の質問んと思ふよりありその所以箇様々々々意哀の趣を宣示
あて又のまろ、候ま明日已牌時候の竹林異風を公文廳召よまべ。あの餘の
事ハ候ま有司の侍へて準備をせよと詞急迫く吩咐れ復たあるは果ていそ
宿所へ退り。躬て人を走らる。那骨董經紀も祿齋屋余市を召る。下
知の趣を言示。時分を錯む異風を乃て参るべ。と課まれば余市の既事
成すぬと思へ満面うち笑れ。言兼あてを退りける。介程有司の復た傳達
ゆ。各その下知を乃て事の準備を做し程ある日暮て明の朝余市の辰牌左側より

早く異風相俱して管領政元の郎の伺候ハ公文廳の局の外面在り等と約莫一
胸許既のく當廳の有司の毎皆出仕なぬらと思へ程の警言固の走卒聲高きハ
四條某の町も經紀余市許歇宿せず逆旅の画工竹林異風ハ在るや疾参りハ喚
ぶ異風余市同音の異風風よりあふ在り兼りハぬくと答へ遽く身を起其件の走
卒這方へと局の内あまあせける當下異風先ハ找てあそる。あの公文廳の光景を
見且余有司左右ハ羅列れて管領のいも出る。又有司等の後方。帷幕の裏面
ハ身甲ある力士三四十名ハ短槍鉤索を執るあり并頭人ハおれた兩個の武士
一對の武器ハ整々として和ら又局の左右ハ警言固の走卒三二十名各桿棒を衝立
四下眼を配りて居り思ふ増々武備嚴重多威風凛面と向くもあふ余市ハ
異風のいもそのあるを必だ安危のふと思へ胸安から。跪居る。姑且て政元香西
復を先ハ立一個の近習ハ大刀を執り屏風の背より出来て儲の高座の着ハ

後方侍一個の近習が那金岡の虎の画軸を管より出、蓋の載て主君の側借不
けり。登時有司聲を被て誰ある召人異風を疾参らせよと喚ま、一個の青侍ある
はて早く異風を喚升し、縁頼み来て来ひけり。異風よの目打扮申の時可る。銅色の
尉斗目衣の鳥紋紗の十徳の肩衰て陳て赤小豆色の做りたるを披り引れて馳
政の面前を畏る。昨宵猛可敗衣店を買整する公服の下衣をひき、膚寒げゆく。
鳥羽画の筆意似たり。是も一家の画風歟と思ふ青侍の笑ひを忍びて、儘推居退
程の一個の有司膝を杖をて信と異風も向ひて竹林異風美れ替故内覽を願ひ、
故画の美を館み、尋多の言あり具の答稟さへ。といれ、異風頭を上げて仰
美りひね、那金岡の虎の寫真の事ある家の口碑を書寫し、憲覽を備まつり。如
相違あるべし。いざとまうを政元も聞てをれ異風嚮ふ進らせ。那虎圖の傳來
書の尙も眼の點するべし。立地の抜出人を傷ふ危殃あるといひ、其要神して價を貴

せん爲るべ。唐山も余る例あり。譬へ唐の李王献が画き、羊の畫は出で草を齧む。夜
欄中の隱るる是幻藥をも致し、所の画の奇特あり、そのよを僧賢寧着破り
ぬ免有侍れ、我國俗相傳へ。昔者金岡の畫馬、馬の夜出て胡枝花を齧、
件の羊を師ゆり、又張僧繇の画き、龍の敢其眼の點せ、人強て點せ、其龍忽地枝
出て雲に乗りて飛去、那末寫る物あれども、亦幻術をりて致し、所の人の眩惑
をて、かゝるその画を神せ、豈信の画龍のその理ありて介らんや、是れ思ひ、金岡
亦み、其画を神せ、欲ま、虎の眼の點せ、時の人を愚め、
あれ、既の這虎圖を故筆鑿定者流、示る、金岡の真蹟疑ひ、
東山殿の御用の達、た、あれども、目子、身不具、貴人の御物の做、
是繪師、然る、あり、目今、這虎圖の两眼、宜く點、
とく、とい、兩個の近習、出で、件の虎の画軸と準備の筆硯を俱、合抗、

兎もろ 不とり かつて かつて かつて 異風は困り果て 稟を尋 御誼謹て美
 異風は身邊の推着て疾仕れと促しけり 異風は困り果て 稟を尋 御誼謹て美
 なりひひ然る非如貴人御威徳の仰付き喜ぶと或又富家の千金をて誘ふと
 このひとみ 然る非如貴人御威徳の仰付き喜ぶと或又富家の千金をて誘ふと
 這無瞳子の虎の眼は必し點まると倣られ庭訓あり矧又師は異人の教のあま
 町寧ろけれ今も違却けりなごう 御意の特る畏れどもいそまのまを御許容ありて
 餘人仰付きまを願ひなごうと辭ふを政元冷笑ひてやをれ異風父祖の敬師の教
 誨といはと證據もなごう孰も実事にて饒ま今別人をりて眼の點してまご奇特見
 加筆凡画の所以なごうと稟き與の推辭まごう 約莫術者の幻術をりて猛獸を見
 或は糞十獸を濺ぎ樹に立地其術敗るまごう 我既の準備あり尚又実に出
 真虎の亦るまごう力力を聚合せ前より其裏の幕の内は在れ 駈制する難ま
 開る推辭の奇特を倡て上て欺きまごう 其罪特の輕まごう 牢獄の敷きまごう 懲さん
 然も推辭の點まごうと緊しく責て饒まごう 近習の毎左右の件の初軸まごう 閑

筆を添よと推着れ有り司等も共侶の異風まごう 滯せ今も虎の眼の點してまご奇
 特見れまごう 開は来の失れまごう 汝の罪のあまごう 尚又実に出る開未曾有の珍事
 開も又御意の頼てのまごう 及て御感の預まごう 但幻術をりて虎を出まごう 上を慢侮まごう
 罪饒まごう 介る術まごう 疾點まごう 推辭稟まごう 身の爲まごう 後悔まごう 及んやと
 論薦まごう 已され異風平伏る 肚裏の左まごう 右まごう 思まごう 那神童の歳を破る危き所
 爲るれも他果して神佛の化現あり 狐狸の變化まごう 那教も又是実と倣まごう 足らる後
 怖まごう 今の安危の靚面も只點まごう 今も思まごう 頭を拾て御教諭感佩
 仕りぬ家訓及師匠の敬言戒る故一具御誼を辭ひまごう 今も脱る路も活物の
 眼の點まごう 師匠も美めていへ存右も仕らん只まごう 奇特の有無も素より家傳の頼るまご
 試まごう 御用捨て願ひけれと父身硯を引きて懐紙を出る 曩は那行童教
 られる眼の點まごう 画法を甲て寫試るは十二生月と同くまごう 是の毫も忘る心

易しと思ひつれば則件の画虎の雙眼の鳥珠を點と點と馳てき出を有司則受合てを俣主
 君の皇國を登時政元へ近習の命をその旁軸を廳の柱に掛させ衆人共のれを觀る小目
 子より一時も活る如き猛虎の勢ひ名筆凝ひるう今其睛を點と點と勢ひ初半
 倍し毛骨竦立可なれば誰の感歎せざるに憶せし二霎時眷惚る就中異風神師の傍
 失せ我をさうさうと思へ膝の抜ひも知らず鼻春蟻ちりて俱に觀る程の怪あひ下那里
 とる疾風颯と音来て掛る件の旁軸を吹翻し翻共但見る白額斑毛の大蟲突然
 志見まいで来る勢ひ高峯を降る如く走り蒐りて異風の吼を愚然と噬締て振二振
 其散と漬る鮮血兵の噬断離らる首の縁頬の輾隕る軀へ仰まる小まけり前未聞
 る一大奇怪の孰も辟易せざるに主從齊一立噪る中香西復六を聲聲しとる
 兵毎出よと叫ぶ帷幕の裏面を扣えり力士頭人種子嶋中大正告紀内鬼平五景紀の
 須破也と俱走り出連り力士を薦めり是より先の景紀の那身の撲傷愈えれば前も

懲りて礮を飛力六準備の糞けと獸の鮮血腸を瀝ぐ者へ瀝掛け短槍鉤索を操る
 士卒の駈止と欲されず幻術の虎をされば穢物も破れ又胎生の獸をば投石器械鉤
 索をさる及ぶに所あらむ逆者へ噬小れ避んとするに跌滾てを折し脚を折し腰を抜し命を
 喪ふ出沒迅速進退猛悪中るべしあふれ復六並有司等近習青侍と共侶の主君を
 守護し退さる齊く屏風の陰に在り又局の左右に排列する警固の走卒敬馬噪三持る
 棒もさ甲斐多を送る人を肴とて威一團に做れる況局の隅に土坐る骨董經紀祿齋
 屋余市の事の異変を胆を洩して二霎時を堪堪外面に出んと欲する出は失ひ跌倒れて
 一聲苦と叫び果てを儘氣絶えうけ介程の虎の連り咆哮狂ひて幾層の人を傷りけん
 衝と走出る時異風の首を衝て轟直る又警固の走卒を駈倒し蹂躪して身を跳らつ高
 擧せ内り之踏るを見る程に往方へ知ざるゆへに這時力士の頭人種子嶋中大正鬼平五
 辛く命免れず力士過半傷られて生死半生るゆへに虎を逐ふに擬勢あり



八代傳心釋卷三十一

十九

大坂の陣



風喪元
不畫巽

八代傳心釋卷三十一

大坂の陣

又只力士們のさる有司も傷見あり。走卒も亦幾名死或は虎に傷られ或は又蹶躪ら
 是て血塗れるも跡をた有侍り。程の政之猛虎のあらざりし見て摩て生る心地り。
 側は侍ら復たふち向て却未曾有の珍事多る。那虎那里にあらけん倘又まゝ人を傷
 け又公私の憂ひを海又中太鬼平五等。あの餘も武勇の者も課て弓箭鑊銃の煨煉
 する。野兵父三四十名を従せ八方一部七々々虎を獵捉せ。意ふ高きせよ。越我
 邸内は在らる。下洛内市中の横行其我失と人皆いふ。あのそ先急ぐ。次は瘦せぬる
 士卒等を宜く勤り宿所へ還て療養せ。雨はまづらぬ。宜旋近習を従て馳と與
 入りける。現興あれ。意氣揚々。與盡ぬ。其宵臆怛々。音行ある者。必奇禍あり。又鬼
 神と侮れ。竟れ鬼責る。たをば。政元異風同轍。其妖孽の齊く。うぬ。猶棄と
 いたす。の間話休題。介程は香西復六。たや件の下知を傳へて正告。景景紀を尋遣。
 又恙る。有司等。別は士卒を召聚。て死人と傷瘡見を出。る。事。の紛乱の

へらあ。その中。小祿齋屋余市。氣絶せ。の。身。と。傷。ら。れ。姑。且。て。我。復。之。杖。不
 携。の。辛。く。七。宿。所。届。る。を。泣。れ。大。驚。心。を。破。り。ひ。ん。を。宵。う。又。發。熱。し。四。五。日
 起。り。ぬ。ぎ。け。然。又。種子。嶋。中。太。正。告。紀。内。鬼。平。五。景。紀。猛。可。小。野。兵。數。十。名。を。従。て。弓
 箭。鑊。銃。の。准。備。足。さ。る。先。邸。中。を。巡。り。て。件。の。虎。を。索。る。不。孰。里。に。知。る。者
 あ。ま。是。よ。又。虎。獵。の。頭。人。を。加。え。れ。各。列。座。せ。ま。り。て。四。方。分。立。出。て。洛。内。洛。外
 隈。も。夜。の。日。も。さ。し。涉。獵。れ。其。影。を。た。ま。ひ。去。向。々。の。地。方。の。民。向。へ。も
 見。ま。の。者。あ。ま。ほ。ほ。而。ま。の。次。の。日。の。已。牌。時。候。の。種子。嶋。正。告。二。隊。の。士。卒。洛。外。東。の。甲
 明。亭。を。過。る。程。人。居。ま。立。在。く。何。せん。瞻。仰。なる。あり。正。告。を。誑。り。て。野。兵。其。衆。を
 拂。へ。せ。立。よ。て。是。を。觀。る。小。島。木。て。久。く。た。ま。い。き。男子。の。生。首。一。級。鼻。首。組。載。せ。り。
 晴。と。定。り。猶。熟。視。る。不。怪。哉。此。是。昨。日。那。虎。衝。去。り。ける。竹。林。異。風。の。首。級。を。見。る。
 什。麼。と。さ。り。ふ。ち。驚。馬。れ。在。り。ける。程。鄙。備。る。一。個。の。行。客。あり。俱。不。站。ま。る。首。級。を。見。て。

側多し人小告るやう己丹波の素田なる某師院の村民でいふの鼻裏られる罪人我村
る繪額經紀箕梨屋異と喚做る奸悪人といふ余る那奴這秋の時候箇様
箇様の情申あて友を殺し妻を誣て伴誑の貽簡を留措き刺す友の錢財衣裳を
奪略りて夜の紛きて亡命あけ六隨即領事仰あうて久く往を索ねりて竟の
知るよりるりい果して天罰免れどして憐る死状を做る那奴箇様と異於鬼子
不義の顛末始の長門より流寓来て九里平の迹を継ぎる他們が羊表半裏のこの
年來の行状並の樵夫樵六の且奇き行童の又金岡の画の虎の都て他們が奸
虐の秘支の村民是を知らざりし住於鬼子の冤魂を市巫の弦の向せし隠匿
竟の發覺れと云其大略を解示共聽平存一駭歎て不思議の思ひける然れ
種子嶋正告も料む件の二奇談を聞いて既の便宜をいふべき公も亦行状を喚禁
うち向ひて目今雨不問語めて這竹林異風の来歴を聞知る酒家の西陣の曾領の

御内人種子嶋中太正告是之原来這異風丹波の素田の多人より昨昨日那奴走
きてる金岡の画の怪虎の往方と索ねて捉鎮めよとある君侯の仰より我黨五六隊四
部で涉獵れども虎の往方と知るよとて及て虎は銜去られ異風の首級とを料
むる今あは見ぬ多亦是奇中の一奇事にて実天罰をらんか那異風が横死をける金
岡の画の虎の眼の點せ異変ふれりその故の箇様々々その崖略を解示して有はれ雨を
召俱て邸は還りて異風の来歴を聞する君侯の御疑ひ立地は氷解せん酒家の從者
参るべしといれて行客頭を擡て并亦思ひの事多漫口を嗜きし連累せし
其争何せんい之鏡を多か勧解を正告聞更は何ぞ介る事あるを答とぞと立ねと
いそして親兵下知て行客を守らしら從ひ七軀てあより又引返して西陣へいそけ
衆人の那画虎の怪談と異風の奸悪を憶も聞知りて且駭驚き且怪共口順ふ做る
あのま目るむ四方の聞を駭怕するはるりけり介程種子嶋正告の那行客を擡て西陣



身。却て行程不諫らざる。殿兵兩名。左右の立。由断る。怪む。一行客。極消せ。見
 えざる。けり。殿兵。是。胸を。凌。吐。嗟。叫。正告。驚。驚。俱。見。不。現。行。客。
 在。ら。る。多。う。原。來。那。奴。も。変。化。多。う。一。次。不。思。議。々。々。と。な。り。不。呆。れ。て。一。要。時。去。り。去。り。
 却。已。死。不。あ。い。ざ。れ。只。得。西。陣。の。う。来。て。隨。即。主。君。政。元。の。件。の。事。の。趣。を。真。の。聞。上。り。お。
 政。元。亦。訝。り。然。ら。丹。波。の。某。師。院。村。へ。早。く。謀。使。を。遣。て。異。風。來。麻。止。素。生。を。質。
 問。さ。る。不。如。三。日。と。猛。可。の。兩。個。の。走。卒。の。吟。吟。て。件。の。村。遣。せ。不。毫。も。懸。い。で。い。か。ん。
 才。の。三。日。許。の。程。不。間。謀。使。も。う。来。て。僕。等。某。師。院。の。村。民。の。尋。問。け。異。風。於。鬼。子。
 樵。六。事。の。顛。末。の。固。様。を。々。々。の。言。嚮。那。行。客。の。不。問。語。の。啗。合。け。れ。ば。政。元。憶。を。
 歎。息。志。て。介。ら。事。の。実。を。那。行。客。に。非。せ。り。神。欲。佛。の。化。現。状。と。思。難。く。思。ふ。も。疑。い。不。
 鮮。け。り。有。餘。り。程。の。紀。内。景。紀。門。五。六。名。虎。獵。の。頭。人。各。列。卒。を。從。て。も。空。々。と。か。り。
 来。り。主。君。の。聞。え。上。る。や。臣。等。の。三。四。日。洛。内。洛。外。三。里。四。方。を。隈。も。く。う。ち。巡。り。て。那。

虎と索ねい。その地其地の民。未も見。き。と。の。者。い。は。ん。攻。据。も。多。う。這。義。と。稟。上。ん。と。く。
 退。り。い。と。政。元。に。さ。う。申。上。り。然。も。そ。の。由。に。自。正。告。の。隊。不。信。奇。事。あり。意。ふ。那。
 虎。出。暴。れ。折。外。面。去。ら。き。と。見。ゆ。幻。の。故。の。弱。軸。か。り。入。り。け。ん。う。ち。開。き。疾。見。よ。と。く。
 則。近。習。の。吟。吟。那。画。軸。を。出。せ。見。る。尚。素。絹。の。虎。を。一。條。は。是。抜。中。より。は。絹。
 へ。か。ら。さ。る。他。尙。遠。く。去。ら。る。と。思。へ。胸。猶。休。ま。ず。一。日。二。日。と。過。さ。程。洛。中。猛。可。の。風。聲。
 あり。昨。宵。白。川。山。中。虎。の。狂。者。あり。某。甲。辛。く。と。逃。て。才。の。命。を。免。れ。某。乙。咬。れ。う。と。い。ふ。
 の。虚。実。分。明。さ。う。う。い。ふ。次。の。日。白。川。の。山。里。の。村。長。並。石。匠。等。諸。来。て。訴。稟。す。索。
 せ。せ。の。と。聞。え。一。那。奇。き。唐。獸。の。我。中。の。躰。を。在。り。書。も。山。を。踰。る。者。一。路。見。暮。さ。し。那。
 虎。の。撞。見。て。命。を。喪。ふ。者。これ。あり。ま。の。故。本。村。の。男。女。駭。怕。甚。者。ハ。隊。を。定。り。て。虎。を。防。ぐ。
 准。備。の。他。事。も。宿。所。の。各。戸。を。閉。て。活。業。せ。ざ。れ。ば。飢。餓。不。及。ん。と。早。く。獨。戸。の。仰。付。き。ま。て。
 虎。害。を。除。せ。ぬ。と。連。署。の。願。書。を。り。て。官。の。請。稟。す。と。政。元。い。は。ん。驚。驚。憂。ひ。て。近。來。

對治せらるべし。其村民を宿所へ還し。其後又香西復六と有司們を聚合せし連
ア衆議を擬せども。大家計の出る所。先洛外なる獺戸小課にて。虎と退治志
あて多く。獺戸を召聚て。募る小賞錢と重くまきども。獺戸等悦び。皆辭ひ
稟せり。非如猛獸なりとも。熊狀狼のいひ。較て捉るべし。他熊狼より猛
十倍せる。唐山の惡獸也。且肉身の者多し。故に名画の火ありて。抜出るべし。弓前鍊
砲のよ。及ぶくもいひ。其美饒さ。ひねと異。同様の流り。と有司等。聽き。頭を掉て
若們國恩を載て。安く宅着を養ひ。候時。御用の達。感活業を召放ち。地を
追放せらるべし。然れども。御談に従ひ。と眼を瞑らして。權志一。獺戸等。困り。果て。只
得言兼して。退りける。中。血氣壯。名聞と好。或賞錢の。其。利と。一。命
命せらる。者。毎。敢。那。虎。と。怕。ま。して。の。他。原。是。故。画。の。妖。る。ま。ば。公
と。焼。ん。各。俱。大。銃。と。火。茶。を。多。く。准。備。七。獺。一。獺。で。試。ま。と。連。り。不。薦。り。て。已。ま。う

け。是。大。家。を。れ。小。將。大。さ。ま。と。然。ら。左。せ。右。せ。んと。隊。と。立。暗。號。を。定。め。各。火。某。腰。餉。の。准。備
を。鍊。砲。竹。槍。列。卒。繩。を。携。て。白。川。山。の。攀。登。り。件。の。虎。と。涉。獵。り。一。晝。夜。小。及。ぶ
ま。で。虎。小。遇。ぎ。る。隊。も。あり。或。虎。と。見。出。て。連。り。鍊。砲。を。放。懸。れ。ども。虎。へ。れ。物。も。甚。だ
縦。横。無。身。小。走。り。蒐。り。て。其。獺。戸。等。を。噬。倒。せ。勢。ひ。中。る。べ。う。も。あ。ら。ざ。れ。ば。准。備。悉。相。違
て。矢。場。小。命。を。喪。ふ。者。あり。幸。ひ。小。七。死。き。り。も。を。傷。ら。れ。脚。を。折。せ。て。半。生。半。死。あり
ぬ。も。ま。け。れ。い。ま。虎。小。遇。ぎ。る。獺。戸。等。も。怕。ま。て。久。く。休。め。大。家。山。を。逃。下。り。て。巴。提。便
姓。氏。の。短。劍。馮。婦。博。者。一。卷。小。倣。んと。欲。する。者。あり。其。故。其。隊。母。故。老。們。俱
政。元。の。郎。小。詣。て。事。任。々。と。期。て。復。催。促。小。従。へ。是。より。風。聲。貫。々。と。那。虎。昨。宵。へ
林。麓。小。下。り。て。聖。護。院。の。木。林。小。在。り。明日。日。枝。の。山。小。遷。入。飲。東。山。の。御。所。の。頭。も。心。許。ぬ。一
倘。亦。那。虎。智。茂。河。を。ち。渡。り。て。洛。中。を。横。行。禁。裡。御。所。撰。家。官。方。花。の。御。所。と
稟。せ。とも。防。禦。易。う。ら。る。と。罵。噪。ぐ。程。小。寺。院。の。尼。姑。及。坊。間。の。婦。幼。們。今。い。ま。虎。の

出来り如く戰慄して昏るも門戸を閉て潛居り然が神祇伯陽陰家の惡獸對治良賤
鮮厄の祈禱あり又獻山出の三塔の大衆詮議して武と嗜む暴法師の鏃を磨き武具を
準備して虎備入る射て捉んとて骨膏引て瘞あり然らぬ猛虎調伏の讀經暇を
ける修法の亦只是のるる洛内洛外の寺社これ為の皆丹精を抽く祈らざるはたの
法驗感応の聞えざるの故の管領島山政長の將軍家議尚の仰より二百許の士
を領て東山殿を守護をり他の在京の武士を課て内裡並花の御所
を守らるる且管領政元の妖虎の由来を尋ねるて早く對治の計議を旋らしその
器の勝る勇士を擇り藤を鎮め民を相て上下安堵の大功を望み奏せざる辰襟襖を
へる聞ゆる這回の妖孽の京兆政元奇を好る遊戯より事起りてあは至る尙對治
遲滞其身の爲宜かざるを緊く責むるひの政元痛く畏りて且羞且集燥で
ありし始骨董經紀余市奴が刑餘の五人異風を汲引て那勿軸の内覽を請ふれば

あそ。這妖孽の起りこれ有恁れは是の罪の則異風と余市ゆ在りそ中の異風積不
善の天誅予がを俟て風く道級と梟られ先や余市を罪として召捕せ首を切て其
人ひと塞ま我上後安らうと尋思と有司の命て猛可余市を召捕て罪をな罪を
倡て斬首の刑を行ひけり現苛政の虎より酷いをいふる古人の格言思ふ。然る這録齋
屋余市も亦是好人のむらむらよの時に方て東山殿奢侈せ次は茶器奇石故書画の
類都ては死貨をのみ弄び多ふと骨董と宗と管領經紀見の毎利を射るを射るは
就中這余市の政元の親よりけは東山殿の求むる東西といへ人譲らざ并て政元の
ては就て那方ぎ進むるは是用ひら現小錢を棄ざれば大錢は自然の勢に余市の
勉て那家の權幸るる香西復六の餘の有司の時々人情を厚く上下の資助を
とせりあそり其利火計の經紀見の十倍されも尚飽を出所不正の東西と知り買
ある賣もこれを資助宜けは其崇のあそ漸々家優めて奴婢をある高上までめ

和漢新故の珍器珍物ヲ積ル庫不在。盈ル虧ル天理ヲ知らぬ。御高典出所詳々。以異風を
家小留て利を欲する。故画崇て病着あり。病着愈て起中。日小那身の召捕られて首を喪ひ家
庫財宝没官せしめて宅着へ追放せられけり。然けども人小預け餘財系二百金ありけれ余市
獨子某は是を抱て母と共近江走ると名変て小社の神主小做りし子孫才小相續あり。
去は是後の話。現汝出で汝返る善悪應報の理り。只這經紀の事。始那虎の暴中折或い
命を喪ひ或は残を蒙りける。有司力主走卒はら。其後又百川山にて那虎小傷られ。行客吉良鶴を食
皆是殘忍貪婪不孝不義の毎々好人小個も。且善人那山を夜茶越さる虎小撞見さ有
恠れは是靈獸へ世の民の父母する者さき仁政を行ひ多征せざし那虎小必出さる。下業識者
批評聞おまも政元其言迂遠して敢用ひず及て身の非を飾んと人小屠る三家の像。經紀余
市誅戮さける後の話説甚麼を。開の卷を改めて是より又下の面小解分ると聽ねが。

南總里見八犬傳第九輯卷二十七終

